

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 63 No. 1 2011

主幹 佐野 正之

巻頭言

4つの誤解

横浜国立大学名誉教授 ● 佐野 正之

日本の英語教育は「3つの誤解」に支配されてきた、と国際経済学者の大前研一氏は指摘している。まず、「英語力は英文和訳や和文英訳だという誤解」であり、第2は「英語を勉強するとは no sooner than ~などの例文の暗記だという誤解」であり、第3は「減点主義のテスト」だという。このような誤解が続く限り、国際社会で通用する英語力は到底身につけることができないというのが氏の主張である。

第1の誤解については、教師は「受験のため」と言い訳するが、こうした出題は確実に減ってきている。だから、このような教師は、受験を口実に自分が一番楽できるやり方に甘えているのだ。第2の誤解は、コミュニケーションのための授業をしているはずの教師でも無意識のうちに行っていることが多い。たとえば、ターゲット文を文脈もなく導入し、ターゲットに絞った文型ドリルを与えるだけで終わっていると、文が使用される状況や場面と切り離されてインプットされるので、アウトプットの時にもまとまりのある英文の中で出てこない。他の文も交えて意味のある文脈の中で導入すると同時に、単文のドリルで終わらず、談話の中で使用する機会を与えて初めて、この誤解から抜け出すことができる。

第3の誤解は、英作文の採点で顕著に現れる。local errors (スペル, 冠詞, 前置詞など) と、意味の違いを生む global errors (語順や時制の誤りなど) を同様に減点することで、英文全体が意味を伝えることにどの程度成功しているのかという最も大切な視点を見逃した評価になってしまっている。いずれの「誤解」も教室では日常的に実行されている。

だが、実はこの3点以上に、もっと重要な誤解がある。それは、「英語教師の仕事は英語の知識やスキルを教えること」と思い込んでいることだ。だが、国際コミュニケーションの手段としての英語を教えるなら、「習慣や発想の違いを認めあい、人との繋がりを大切にす」という異文化間コミュニケーションの精神を何よりも重視すべきだ。すなわち、「知識やスキルに加えて、異なる人と協働できる力を育む」ことこそ、英語教師の最も大切な仕事だという認識を強く持たなければならないと思うのである。

新学習指導要領のねらいと重点

東京国際大学教授 新里 眞男

1. はじめに

中学校では、平成24年度から新学習指導要領に基づく授業が始まる。開始まで1年以上もの時間があるが、それぞれ各中学校では、その内容を検討し具体的な指導方針を探っていることだろう。

今回の改訂の重要なポイントはなんと言っても「4技能の総合的な指導、統合的な活用」である。この「総合的」や「統合的」という言葉は、学習指導要領本体には、前者が一度だけ使われているだけである。しかし、『解説』の「外国語改訂の趣旨」の部分では、1ページほどの文章の中に前者が3回、後者が1回と両方で4回も使われている。その他「四つの領域をバランスよく指導し」という表現もあることから、「4技能の総合的な育成」という考え方が、今回の改訂の最重要なコンセプトであろう。この基本的なコンセプトと連動していろいろな変更がなされた。



まず、授業時数が現行の年間105時間(週当たり3時間)から140時間(週当たり4時間)に増えた。これは「4技能の総合的な指導」を支えるための基本条件を改善したことになる。また、指導する語数を現在の「900語程度まで」から「1200語程度」としている。これは4技能を使って豊かなコミュニケーション活動を可能にするためであろう。一方、指導すべき文法事項等については、新たな追加はなく、ほとんど現行通りである。つまり、週当たり1時間増えた授業時間を、コミュニケーション活動を図ることにたっぷり活

用できるようにし、それを通して指導事項の定着が一層図られるようにしたのである。時間数が他のどの教科より多くなったことを考えると、文部科学省の外国語教育に関するみなみならぬ覚悟が見てとれる。

2. 4技能の総合的な育成とは

上で述べたように、新しい学習指導要領では、4技能の総合的な育成が最重要コンセプトである。しかし、残念ながら、学習指導要領の本体には「総合的」という言葉が教材に関連した記述に関して一度しか使われていず、具体的にどのような内容であるかを定義しているところはない。このため、「4技能の統合的な育成」の内容は、4技能の言語活動に挙げられている各指導項目を探るしかない。

言語活動には、4技能それぞれに(ア)～(オ)までの5つの指導項目が掲げられている。このうち、4項目目までは、現行の4項目とほぼ同じである。違うのは新たに追加された(オ)の項目である。したがって、この(オ)の項目に今回の「4技能の総合的な育成」のエッセンスが込められていると思われる。それらは次の通りである。(下線部筆者)

- (1) 聞くこと：
 - (オ) まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること。
- (2) 話すこと：
 - (オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。
- (3) 読むこと：
 - (オ) 話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること。
- (4) 書くこと：
 - (オ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。

以上の新しい項目のうち注目に値するのは、具体的な活動として明示されている「スピーチ」活動である。一般的にスピーチを行うためには、テーマの内容を深めるために人の話を聞いたり、資料を読んだりする。ここで聞くことと読むことが関わる。次に中学生レベルでは即興スピーチよりも前に書いたスピーチを人前で発表することが普通である。ここで書くことと話すことが関わる。そのスピーチを聞く聴衆にとっては、聞くことの技能が関わる。さらにスピーチ内容についてQ&Aを行ったり、議論をしたりすれば、話すことが絡む。最後に、聞いたスピーチ内容について自分の意見や気持ちをまとめ、英語で書くこともできる。それをクラスの全員にコピーして読んでもらい、意見や感想を書いてもらうと、読むこと、書くことが再度関わることになる。こうなると、4技能が全部、それも場面を変えて繰り返し活用されることになる。その活用を通して4技能の総合的な育成が図られることになる。つまり、スピーチ活動は今回の学習指導要領の基本コンセプトを最も明確に示す活動であると言える。

もちろん日常的な言語使用においては、4技能の1つだけが単独に使用されることもあるが、聞いたことについて話す、読んだことについて書く、書いたことをもとにして議論をするというような複合的な言語技能の使用が通常である。新学習指導要領で目指しているのは、そのような複合的かつオーセンティックな言語の使用場面を教室の活動として取り入れることで英語力の育成を図ろうとしているのである。

ここには、英語という言語を実際に使うことで定着・獲得を目指すという考え方がある。そう考えてみれば、聞くことの(オ)の「まとまりのある英語を聞いて、その概要や要点を適切に聞き取ること」、読むことの(オ)の「感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう」読むことも、さらに、書くことの(オ)の「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書く」のも、すべて実際の言語使用を念頭においての言語活動であることがわかる。

3. 期待されている指導とは

上で述べてきたことから考えると、4技能を総合的に育成することは、単に50分の授業を12分ずつ4分割して4技能のそれぞれを分離・独立させて指導すればよいというものではないということになる。しかし、そのような寄せ集め、アラカルト方式の授業はまだまだ見受けられるので注意したい。1つひとつの活動が生徒にとってどれほど楽し

くても、授業の全体的なねらいに向けてそれぞれが有機的に関連していなければ、4技能の総合的な育成は不可能である。つまり、授業の中で4技能が(全部でなくても複数)それぞれ有機的に関連を持った活動を行ってこそ、定着が保証されるのである。それこそ新学習指導要領のねらいであると考えられる。

それでは、具体的にどんな活動が考えられるだろうか。以下は茨城県のある先生が考えついた活動だが、参考にさせていただきたい。題して「グループ・スピーチ」という活動である。1クラス全体の生徒を対象にして「帯活動」としてのスピーチ活動ならよく目にする。毎回1～2名の生徒が前に出てスピーチするのである。もちろんこのようなスピーチもコミュニケーション活動の1つであり、やらないよりはやった方がよいが、いろいろ問題点がある。たとえば、全員の生徒が繰り返しスピーチを行うには時間がかかりすぎる。聞いている生徒にとって(質問をしたり、意見を述べたりするような形で)参加しづらい。何よりも、年に1～3回程度しかスピーチをしないのであれば、あまり学習が進化しない可能性がある。そこでこの「グループ・スピーチ」が考えられたのである。



クラスを数グループに分け、それぞれのグループ内で1人の生徒が(つまり、クラス全体としては数人の生徒が)同時並行的にスピーチをするのである。各グループの聞き手には、自分のグループのスピーカーの話をまとめてクラス全体に配付するレポートの作成を義務づける。そうすると小グループでの活動なので、スピーチ内容について各グループでQ&Aが行われたり、場合によっては議論に発展したりすることもある。特に重要な点を聞き逃したときはスピーカーにきちんと確認してからレポートを作成することになる。その後、各グループで作成されたレポートは他のグループの生徒が読めるようにコピーが作成され配付される。生徒は他のグループで発表されたスピーチなので、大

いに関心を持って読む。これが「グループ・スピーチ」である。

この活動の中では4技能が自然と有機的に関連付けられて使用されている。見事と言いたいほどである。私自身、この活動を教室で行われるコミュニケーション活動の理想型の1つとして機会あるごとに先生方に紹介している。

4. その他のねらいとの関連

3. で述べた「グループ・スピーチ」活動では、聞くことの(オ)である「まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること」を実際に行うことができる。読むことの(オ)の読んだことについて「感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどする」ことに発展させることもできる。

さらに、書くことの(オ)との関連もある。スピーチ原稿を書く活動の際、従来は、与えられたスピーチのサンプル原稿を示し、そのいくつかの箇所を各生徒が自分の状況に合わせて言い換えることをやらせる。そうすると自動的に新しいスピーチ原稿ができる。従来であればこれで十分であると考えられるが、「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。」という今回の「書くこと」の(オ)の指導項目には十分に対応していない。

まず、モデルのスピーチ原稿のうち、あらかじめ決められた部分だけを各生徒に考えさせるのでは、「自分の考えや気持ち」を伝えるという点からは、物足りない。やはりマッピングなどの手法を使って、なるべく生徒1人ひとりの思いを引き出させる工夫をすべきである。また、モデルとなるスピーチも複数用意して、それぞれどのような内容が書かれているか分析することによって、どの程度のことで書けるかを、生徒に自分で発見させることも大切である。



さらにマッピング作業で書くべき内容を考えられたら、そのうちのどのトピックを実際に取り上げるかを考えさせ、さらに、そのように選択したトピックをどう配列するかを考えさせる、というプロセスを経させることにより、「文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと」という指導項目に対応した作業を行わせることができる。もちろん、内容的な配列順序だけでなく、それに付随する英語表現(たとえば、first, second 等の順序を示す語や、for example などの例を示す表現など)も指導する。

5. 指導と教材の在り方

上で述べたようなスピーチ活動は、かなり時間がかかる。他の表現活動にしても同じである。したがって、学期に一度ほど取り入れる程度であろう。その際、その学期で学習した項目の総復習をし、さらに、それらの項目を新たな文脈で使えるように、各課が有機的なつながりをもつような構成になっている教科書が望ましい。

また、最近、高い英語力をもつ若い英語教師が増えてきたが、そういう英語教師は逆に音読や文型・文法の指導などの具体的指導法に慣れていないことがある。また、授業の組み立て方をよく知らない指導経験の浅い教員も増えてきている。そのような教員であっても、教科書の流れに従うことによって、自然に指導の手順や手法を学ぶことができるような「啓蒙的な」教科書の出現も望まれるところである。

外国語教育は、指導項目がほとんど増えないのに、週当たり4時間の授業を与えられた。その目的は、4技能の総合的な育成を行うためである。そのような指導の理想例はすでに述べたようなスピーチ活動にある。このような活動を通して、今度こそ、生徒のコミュニケーション能力の大きな発展を目指したいものである。



新教育課程へ
向けて

プロの英語教師としての指導と教材のあり方

——第1学年に望まれる指導と教材——

兵庫教育大学教授 山岡 俊比古

1. はじめに

小学校において英語活動が開始されて以来、小学校との連携を議論する中で、変わらなければいけないのは中学校の英語教師であるとしばしば言われてきた。この主張の言わんとすることを確認しつつ、以下では、新学習指導要領の下で行われる中学校英語教育について、とりわけ第1学年について留意しておきたいことを述べる。

2. 小学校外国語活動を知る

まず、中学校英語教師は、小学校での外国語活動の内容を知る必要がある。小学校では、音声英語を通じて、言語や文化について体験的な理解を深め、積極的コミュニケーションの態度を育成し、英語の音声や基本表現に慣れ親しませ、これによって英語のコミュニケーション能力の素地を養うことを目標として授業が行われる。

授業は各種の体験的活動という形態によってなされるが、小学校英語を特徴づけるこの体験的活動が小学校児童の側でどのように受け止められているかを考えておく必要がある。実のところ、以下の3つの場合を想定しなければならない。

- (1) 活動そのものが楽しいので満足している。
- (2) 学びの実感を伴わない活動に倦んでいる。
- (3) 学びをもたらす活動を楽しみにしている。

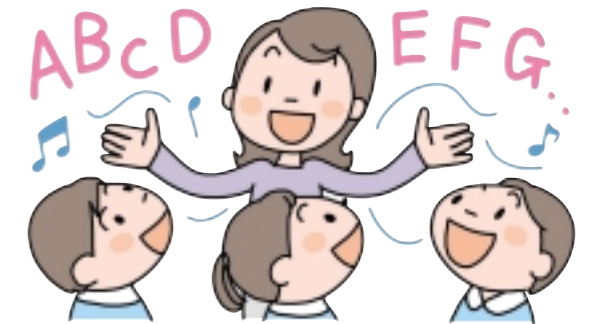
ここでいう「学び」とは、英語そのものを学んでいるという自覚で、幼稚にことばを機械的に繰り返すだけの対話ごっことしか児童に受け止められないような活動では生じえないものである。

実際、中学校新1年生の中に、この3種類の生徒が混在していると思われる。これは児童の個人差のためであると同時に、受けた授業の違いにもよる。いずれにせよ、異なった小学校の異なったクラスから集まってくる新1年生は、

英語の学習に対してすでに異なった気持ちを抱いて入学してくる。これはまずもって心得ておくべきことである。

新1年生が小学校で体験してきた英語の音やリズムや基本表現についても、同様の注意が必要である。小学校では、おもに担当が英語の活動を指導することになっているので、英語教育のプロではない担任個人によって、示される英語の程度が大幅に異なるからである。

小学校では、『英語ノート』によって学習内容が標準化されているとはいえ、学校によって英語活動の開始が中学年とか低学年であったりする。そのような場合も含め、小学校では自作教材が利用されることが多い。その場合、活動において使われる語に特徴が出る。小学校では、語選択の基準が児童にとっての身近さ(近くに動物園がある等)や個人的趣味(好きな昆虫等)であったりするので、おもに使用頻度という客観的基準によって語を選択する中学校と異なる。したがって、児童は、たとえば、flying squirrel, dormouse, stag beetle, swallowtail など、中学校英語教師にはあまり馴染みのない英単語を知っている可能性がある。



さらに、音声重視といっても、小学校でまったく文字を扱っていないわけではない。『英語ノート』では、文字や語を読ませたり書かせたりすることはほとんど行わないが、見せてはいる。たとえば、『英語ノート1』の第2課の見出しは、「Lesson 2 I'm happy. ジェスチャーをしよう」とな

っている。また、『英語ノート 2』の第1課の「That's right. アルファベットで遊ぼう」では、アルファベットの大文字の読みを、個々の文字を示しながら聞かせ、「The Alphabet Song」を歌うことになっている。

3. 生徒をチェックする

以上の小学校での英語活動の特徴を踏まえると、中学校英語教師、とりわけ1年生担当者は、自分が担当するクラスの実態を知らなければならない。

まず、英語の正しい発音を生徒がどの程度まで身につけているか確かめなければならない。これは、平成24年度以降、4月当初に必ず行わなければならない行事となる。これを行うには、生徒が小学校の時に経験した身近な外来語を再び利用するのがよい。外来語としての日本語の発音と英語としての発音の対比は、そのための格好の材料となる。もし、教科書にまさにそのことをねらったページがあれば、これを利用することができる。

『英語ノート』には、I like apples. ; I don't like blue. ; I can swim. ; I can't swim. などの文レベルの表現が出てくる。これらについても、その学習状況について、生徒に探りを入れる必要がある。次の3つの可能性がある。

- (1) まったく表現を覚えていない。
- (2) 決まり文句として覚えている。
- (3) ある種の型として学んでいる。

型としての学びとは、I like/don't like X. とか I can/can't Y. のように、一部を入れ替えることで類似表現が言える状態で、それぞれの文の一般的規則化への方向性を持った学習段階である。

担当の生徒がこのような文レベルの表現をどのように身につけているか確かめることは必須であり、それ以降の指導の仕方を決定するものである。したがって、そのようなチェックを行うための活動を考える必要がある。教科書にそのような活動が備えてあれば、それを使うことができる。

このような当初におけるチェックを行いながら、体験的活動への生徒の反応を確かめることもできる。同時に、中学生は認知発達的にはいわゆる形式的操作期に入っており、全体的にそれに見合った学習形態を求める傾向が強くなっている。したがって、生徒は一般的な説明やまとめなどをほしがらようになる。教師としてはこれに応える必要があるが、そのような手当てがしてある教科書を使うことができれば好都合である。

4. 音から文字へと導く

中学校新1年生は、英語の文字に対していわばじらされた状態で入学してくる。小学校で、英語のアルファベットをローマ字として読み書きも含めて体験した生徒がいるものの、英語の文字としては、『英語ノート』によれば、文字を見ながらそのアルファベット読みを聞くことにほぼ留まっている。

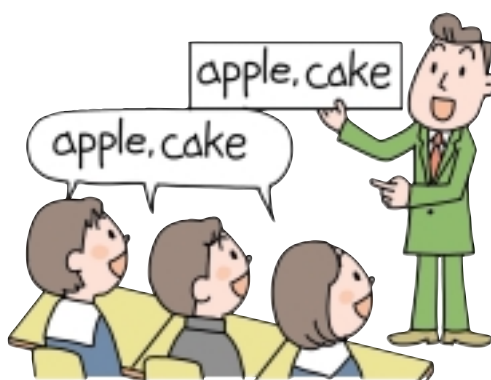
児童がローマ字で、たとえば desuku とか arubamu とか書けるのにと考えているとすれば、焦燥感はお一層高まってくる。

しかし、英語の文字としては、各文字が1音対応でないことと、綴りと音の関係が複雑であることも含め、ていねいかつ計画的に導入しなければならない。

当然のことながら、各文字の読み方と書き方をマスターするのが第一歩で、その上で、文字を読み、語を綴ることが続く。語を綴るときには、たとえば desk とか album と書くことになるので、正しい英語の発音を聞き、正しい発音をすることがその大前提となる。また、綴りと音の関係については、フォニックスの基本を取り入れた指導も効果的であると思われる。

以上のことをすべて考慮に入れると、中学校での文字の導入は、従前と異なり、1つの課を当てるぐらいのていねいさと組織性が求められる。また、正しい発音については、早い時期に継続的に取り組むことが望まれる。フォニックスについても、要所要所で指導を行うのがよい。

いうまでもなく、そのような手当てをした教科書が使用できれば、教師が自分でこれらをお膳立てする必要はない。



5. 正しいモデルを示す

発音にしる、音読にしる、教室英語にしる、対話にしる、すべての言語活動において、中学校の英語教師はできるかぎり正しいモデルとならなければいけない。小学校では、担任の役割は、児童と共に英語を学び、臆せず積極的にコ

ミュニケーションを図ろうとする態度を体現する学習者としてのモデルとなることであるといわれる。中学校の英語教師には、小学校の担任とは異なった、英語学習のプロの指導者としての明確な役割が与えられている。

しかしながら、正しいモデルを提示することが正しい学習にすぐにつながるとは考えるべきではない。正しい学習は徐々に進み、時間をかけてできあがる。このことを認識しつつ、同時にその学習を促進する手だても講じる必要がある。

たとえば、発音指導においては、当初から生徒個人の間違いを取り上げて修正すべきではない。小学校では修正を受けることを体験していないので、なおさらである。生徒の発音をチェックし、計画的に、組織的に、かつ初期集中的に指導するのがよい。その際、発音の仕方を説明すれば効果的であることが多い。日本語の「ファン」の最初の子音と“fan”の最初の子音など、発音の仕方をそれぞれ説明すると、違いが明確になる。“who”も「フー」ではないことに、簡単には気づきにくい。

また、文レベルの文法についても、いわゆる基本文と呼ばれる各文の構造上の特徴について、一般的な規則として簡潔明瞭に説明しておくのがよい。認知発達上、中学生はこのような抽象的なレベルでの学習を求める傾向がだんだんと強くなっていく。

しかし、当然のことながら、このような規則学習は、それ自体が目的ではなく、それを使いこなせるようになることが目的であることを教師も生徒も共通して認識しておく必要がある。いうまでもなく、その認識を徹底し、維持するには、基本文ごとに、その規則の使用に向けた言語活動を常に用意しておく必要がある。

発音指導の初期段階において必要となる計画性、組織性、集中性については、教科書にそのような工夫がしてあることが望ましい。また、基本文における説明とそれに伴う言語活動の準備については、教師の工夫の見せ所という面が強いが、基本的なものについては、やはり教科書に載せておくべきである。

6. 自己表現を育てる

外国語学習にはある種の不満感が常につきまとう。基本的に、内容的に幼稚ともいえることを、場面的な真正さの乏しい教室で、自己関与の薄い状況で学習が行われる。もちろんのこと、教師はこのような面を補うべく、さまざまな工夫を行うことになるが、1単位時間において、その時間の目標を学習する中ではそれが困難な場合も多い。

このような限界を超える1つの方法は、いくつかの課にまたがって、それぞれの課の学習目標を組み合わせることで自己表現をねらいの1つとして設定することである。個々の課では、実現しにくい自己表現活動も、使える表現を集めることで、やりやすくなり、より現実的な自己表現が可能となる。もちろんのこと、自己表現では、自分に関わるいろいろなことを、皆の前という現実の場で発表することになる。

このように、課をまとめる構成を作り上げれば、各課の言語活動も、最終的には自己表現につながるものとして位置づけることができ、その意味において、生徒を励まし、動機づけることにもなる。同時に、各課を積み上げていけば、ねらいの自己表現ができるようになるという見通しも生徒に与えることができる。

たとえば、I'm Ai. ; I'm not a soccer fan. ; I like music. ; I don't like tempura. ; I have two sisters. のような例文で示される基本文を扱ういくつかの課の後に、「自己紹介」という自己表現活動を設定したとすると、それぞれの基本文が自己表現につながるものとして、俄然、自己関与的に意義を持つてくる。



教師は、教科書をそのように見立て、自己表現活動を取り込むことが望まれるが、教科書自体がそのように構成されていれば、それに越したことはない。

7. まとめ

小学校で外国語活動を経験して中学校に入学してきた新1年生が、中学校英語教師の指導を受け、「やっぱりプロの英語教師は違う」と納得する場面を是非とも頻繁に目にしたいものである。

中学校の英語の教師は、発音がよく、正しい文を楽々と言い、子どもが知っている英単語はすべて心得ており、何よりも、英語の勉強の仕方の指導ができ、学習の積み重ねにおいて計画的であると生徒に思わせるのが理想である。

1年、3年との連続性を踏まえた指導のあり方

——第2学年に望まれる指導と教材——

福岡教育大学教授 高梨 芳郎

1. はじめに

平成23年度から小学校では5年生・6年生で「外国語活動」が週1コマ(年間35単位時間)、完全実施される。中学校での英語の指導では、小学校での外国語活動の基礎に立ち、小学校外国語活動との円滑な接続を図ることが前提になる。「聞くこと」、「話すこと」が中心である小学校英語活動から、中学校1年で音声と文字との関係の理解をふまえ、文字の併用による言語学習に移行することになる。

中学校2年では、第1学年の学習内容を繰り返し指導して定着を図り、「読むこと」、「書くこと」を加えた4技能の総合的な学習へと進み、中学校3年での学習につなげる指導が必要である。このように、中学校2年では、特に、1年、3年との連続性をふまえた指導が欠かせない。

平成24年度から実施される「中学校学習指導要領(外国語)」では英語の授業時数は現行の年間105時間から140時間(週3時間から週4時間)になる。また、中学校の3年間で指導する語は、「900語程度までの語」であったが、「1200語程度の語」に増加する。

このような授業時間数と単語数の増加は、幅広い言語活動を可能にする。中学校2年でも、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の総合的・統一的な活動の実施が必要である。中学校の英語授業ではコミュニケーション能力の基礎を育成することが目標であるので、第2学年でも文法の指導はコミュニケーション能力の育成を図るものであるという考えで指導する必要がある。

中学校での英語教材はコミュニケーション能力の基礎を総合的に育成するため、実際の言語の使用場面や働きに留意して取り上げるとともに、生徒の発達段階及び興味・関心に即して適切な題材を選択することが重要である。特に、伝統文化や自然科学などに関するものも含める必要がある。

中学校2年の指導と教材も、このような新学習指導要領の特質と、第2学年としての生徒の発達段階を考慮する必要がある。これらのことをふまえて、中学校2年での適切

な指導と教材について具体的に提案してみたい。

2. コミュニケーション能力の基礎の育成

(1) 自然な対話文による基本文の提示

英語の授業の進め方は多様であり、本文の内容から入る場合もあるが、基本的な方法は基本文のオーラル・イントロダクションから始めることであろう。

しかしながら、オーラル・イントロダクションは適切な状況設定を考えるのが難しい。それならば、基本文の意味や言語の働きが状況の中で適切に理解できる対話文が教科書にあるとよい。それによって、生徒に新しい文構造を理解させ、使用できるようにすることが可能になる。たとえば、2年生で「～すること」を表す文であれば、自分のしたいことについて言うような状況設定で、自然な流れの対話文が教科書にあるとよい。その際、大切なことは、生徒が基本文の意味や言葉の働きを適切に十分に推測できるような形で基本文を提示することが大切である。

対話文は、学習の「めあて」(「～ができるようにしよう」)の次に提示してあると、要点がはっきりする。中学校2年であれば、より自然な状況設定ができる4行位の長さでの対話文の提示が望まれる。そのことで「実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮した」教材となる可能性が高い。最近の英語教育の用語で言えば、フォーカス・オン・フォームを取り入れた指導が可能になると言ってよい。使いやすい教科書に向けた取り組みである。



(2) 「聞く」「話す」から対話練習へ

コミュニケーション能力の基礎づくりには、基礎・基本の練習が欠かせない。基本文の提示・理解が終わった後で、十分な練習が必要である。その練習では、まず、新出の基本文の理解を「聞くこと」の練習によって定着させることである。類似する絵を見ながら、耳から入る英語にふれ、簡単な聞き取りをすることで、たとえば、「～すること」の表現と内容を英語で聞いて理解し、want to～の構造と意味を理解できるようにすることである。次に、聞いたことに関連させて、絵を見ながら語句を換え、新出の文構造を用いて「話すこと」の練習をすることである。文構造を中心にした「話すこと」の練習である。たとえば、「～すること」の内容を絵とヒントの語句を利用して、want to～を使って英語で話す練習である。

中学校2年生であれば、さらに「自分のしたいこと」について、たとえば、「日曜日にしたいこと」を英語で、対話で言えるように指導する必要がある。この段階の対話練習は、自分の考えや意向を伝えるための基礎的な練習であって、コミュニケーション練習である。

このように、「聞くこと」、「話すこと」、コミュニケーション練習を行った後に本文に入れば、本文の指導はより容易になり、理解度は向上すると考えられる。また、本文の学習が終わった段階で、この練習を「書くこと」の活動につなげることができれば、さらに自己表現によるコミュニケーション能力の基礎が養われるに違いない。たとえば、want to～を使って自分の将来なりたいことについて単文で書く活動である。

(3) 4技能の総合的指導

「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などの伝達能力の基礎を養うためには、単に英語の文法規則や語彙などについて知識を身につけるだけでなく、実際のコミュニケーションをめざして英語を使えるようにすることである。言語材料についての知識・理解を深める言語活動から考えや気持ちなどを伝え合う言語活動に進めることである。そのため言語活動の取り扱いは、言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせることが基本になる。言語の使用場面や言語の働きは個々の技能ごとに特有なものも多いので、当初の言語活動は技能別に設定したほうがよい。たとえば、道案内は「話すこと」に特に関わるし、依頼や約束も「話すこと」に主に関係する。「身近な暮らし」の場面や「情報を伝える」ことに関わる言語の働きで日記を取り上げる場合は「書くこと」になる。また天気予報は「聞くこと」が主であると言ってよい。

4技能の統合的指導の前に、個々の技能ごとの言語活動を十分に行っておくことが大切である。その際、聞き方、話し方、書き方などの要点も指導するとよい。また、教材では、第2学年の場合、新学習指導要領では「第1学年における学習内容を繰り返して指導、定着を図るとともに、事実関係を伝えたり、物事について判断したりした内容などの中からコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること」となっているので、2年生に相応しい話題の選択と取り上げ方が必要である。たとえば、道案内にしても、Could you～?などの1年生にない依頼表現を使う言語活動が必要で、天気予報では、明日の天気を聞き取って明日行くことを決めることなどの言語活動も、新たに必要になると考えられる。



(4) 本格的な「読むこと」の指導

「読むこと」に関しては、2年生では本格的に読む指導をしたいものである。その際、題材内容が問題になるが、まとまった内容の英文を読んで内容や考え方をとらえることをさせてみたい。そのためには、グラフなどを用いた自然科学の内容の英文を教材に選択するのも工夫のひとつである。

新学習指導要領では、取り上げる教材の例として、自然科学を新たに加えている。2年生でも理解できる理科や数学などの内容の教材はその好例である。理科や数学などの英文とともに内容把握の問題があれば、生徒は必要な情報を得るために、「読むこと」の言語活動に積極的に興味をもって取り組むことができるに違いない。このような教科横断的な教材による指導は、内容中心教授法(content-based instruction)にも関連するものである。

(5) 4技能の統合的活動

新学習指導要領では、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」及び「書くこと」の総合的な指導を通して4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成することが目標になっている。このためには、自分の考えなどを相手に伝える「発信力」、まとまった一貫性のある文章を書く

力も必要で、聞いたことや読んだことの内容を、自分の考えや体験とも結びつけて整理し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信する機会が必要である。

他の領域の言語活動と有機的に関連づけて、生徒たちのコミュニケーションを内容的にも充実したものにするのである。このような4技能の統合的活動を各学期ごとに設定して、それまで学習したことをふまえた統合的な言語活動にすることが考えられる。その統合的活動は、中学校3年間での到達目標、各学年及び各学期ごとの到達目標に関連づけると学習目標がはっきりする。

たとえば、2年生の最終段階ともなれば、簡単な表現を用いて賛成意見や反対意見を述べるができるようにしたい。そのため1学期ではコミュニケーションの継続に焦点を当て、2学期では「自分のしたいこと」に関連して将来の希望について書いて発表することなどである。書くことは難しいが、内容を整理するマッピングを取り入れたり、必要な語句をヒントで示したりすれば生徒の負担は軽減される。現行の教科書では、Let's Communicate が各課末にあるが、これを発展的に整理して使い易い統合的な言語活動にするとよい。実行可能で効率的なタスクが望まれる。



3. 豊かな心と地球市民的感性の育成

(1) 理解と発信が可能な豊かな題材

新学習指導要領の「3 指導計画の作成と内容の取扱い」の中の教材選定の観点では、教材は「英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げる」としている。

中学校2年生の教材では、生徒の日常生活についての話題を通して、自分の気持ちや身の回りのことについて英語で伝えられるようにすることがまず大切である。2年生になる前の春休みの思い出や体験、2年生でよく行われる職

業体験学習、旅行の体験などは適切な教材になる。また、外国の社会・文化・歴史について知ることで幅広い国際的な視野を身につけることができる。さらに、日本の伝統文化を伝えることを通して外国の人々に英語で発信できる素養を養うことも可能である。自然現象、生物、科学の話題も、2年生の興味をひく可能性が十分ある。多様なものの見方や公正な判断力を養うためにも、外国と日本の文化を比較して相互に理解を深める異文化理解の話題も欠かせない。

たとえば、日常生活ではお客のもてなし方などの日本と外国の場合の比較を行い、世界にいろいろな文化やものの見方があることに気づかせ、そのような文化をもつ人々の心情にふれることで、互いの立場を知り、共感する態度を養うことができるかもしれない。平和問題、環境問題などの話題も、地球市民的な豊かな感性を育むために必要である。

現行版で特に評判のよい題材は、継承する必要がある。2年生では、Her Dream Came True. や *The Sound of Music* の後日談、Maria Talks about Her Life. などは、上記題材選定の趣旨に合致する。

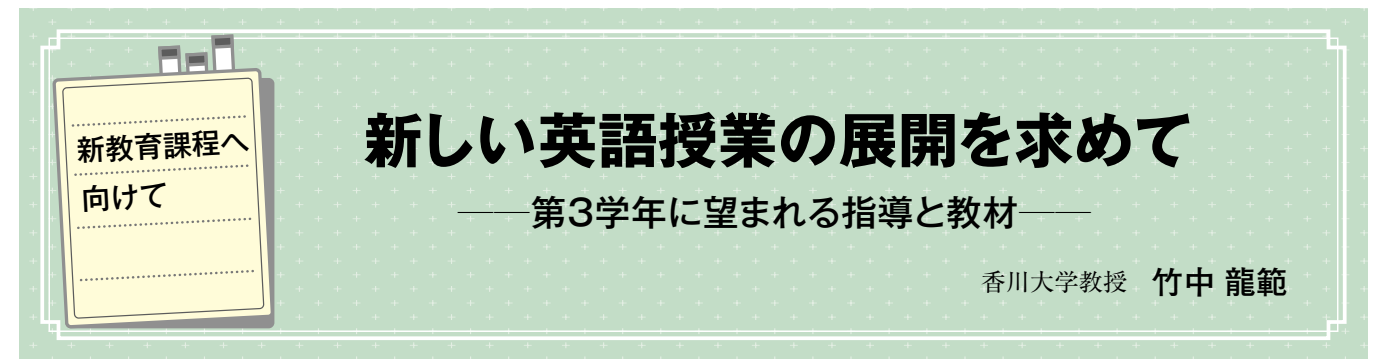
(2) 発展的な読み物教材

「読むこと」は題材と密接な関係があり、多様な読み方が指導可能である。通常課の本文だけでなく、「読むこと」を中心とした課、付録として数課に関連した内容の読み物(現行版の補充リーディング)を設けて、「読むこと」の技能を段階的に伸ばすことや、多読用読み物(現行版の付録リーディング)を与えて発展的な読みに繋げることもできるとよい。高校入試の長文問題へのステップとなるような長さで内容の読み物もあれば、2年生段階の入試対策用として使えるかもしれない。このような読み物教材が2年生にもあるとよい。

4. おわりに

よい教科書の特色として、巻末資料と付録の充実もあげられる。特に、言語活動の充実に必要な語彙・表現を例示しておく、生徒が取り組みやすい。本文の内容理解を進めるためには、コラム記事で本文の文化情報や学習情報を示すことが欠かせない。辞書指導、音読指導、文法のまとめの教材も、生徒が使用しやすいように用意してあると、家庭学習や自立的な学習に便利である。

生徒の自学自習と復習を促すさまざまな工夫をすることも、新しい教科書には大切である。学習段階を踏まえた、使いやすく、英語のコミュニケーション能力が付き、豊かな人間性が涵養される教科書が望まれる。



1. これからの英語授業

平成24年4月には、新学習指導要領が実施されて、新しい英語授業が始まります。新学習指導要領には、週あたり1時間の授業時数増や、3年間で学習する語数の増加が織り込まれ、それによって、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能を総合的に指導し、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力の育成をめざした英語授業が求められています。また、そのために、文法は言語活動と効果的に関連付けて、一体的に指導することとされています。言い換えれば、文法事項の説明に重点を置くのではなく、適切な言語の使用場面において理解させ、その理解のもとに、これを言語活動の中で活用することによって定着を図る、という手続きが求められます。

このような流れをうけて、中学校の英語授業はどのように変わのでしょうか。そのなかで、3年生の授業はどのように展開すべきなのでしょう。さらに、そのためには、どんな教材を、どう使えばよいのでしょうか。

2. 4技能の総合・統合に向けて

今回の学習指導要領では、小学校に外国語活動が導入されることを前提に、中学校では、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4つの技能をバランスよく育成することの必要性が強調されています。この「バランスよく」とはどういうことでしょうか。

これは、毎回の授業におけるバランスという点とともに、3年間を通してみたトータル・バランスが大切であるというように解釈されます。毎回の授業において、4つの技能がそれぞれ等しく扱われ、各技能に対して25%ずつの時間配分を行うということを求めたものでないことは、自明の理と言えるでしょう。各Program(課)で取り上げられたトピックによって、どの技能に比重がかけられるかは自ずと決まってきます。通常のProgramにおいては、一定の授

業展開パターンが求められますが、時には特定の技能に焦点をあてて、適切な場面設定のもとに、それを重点的に伸ばすことも有効に働きます。たとえば、道案内や買い物などでは、「聞くこと」、「話すこと」が中心となり、教科書に示されたモデルは見本であって、これを読んで理解することは目標とはなりません。しかし、同じように、「聞くこと」、「話すこと」が前提となりますが、電話でのやりとりでは、たとえば、留守電にメッセージを残す場合には一方的に話すだけになりますし、電話に出て伝言を頼まれた場合にはそのメッセージをメモする、という書く活動をともないます。



「聞くこと」が主となる言語活動においても、駅や空港などのアナウンスを聞く場面では、多くの場合、一方的に聞いて、自分に関わる情報かどうかを聞き分け、必要であればしかるべき対応をとることになります。しかし、テレビやラジオでインタビューなどを聞く場合には、興味のある内容であればこれを聞くこととなりますが、自らがインタビュアーとなるときには、当然、話すという言語活動が含まれ、音声によるインタラクションが行われます。あるいは、前もって質問を用意しておく場合には書く活動が含まれてきます。

また、現代では電子メールで手紙・文書を送ることも多くなってきています。従来の手書き・郵送による手紙と共通の部分もありますが、メール独自のスタイルも一般化してきて、それにしがたがって読んだり書いたりすることが求められるようになりました。かつて中学生が海外にペンパ

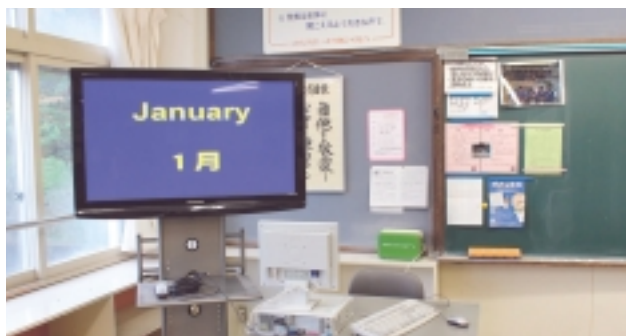
英語教師の裏ワザ

デジタルテレビで手軽に文字を読ませる

北海道洞爺湖町立洞爺湖温泉中学校教諭 大塚 謙二

デジタルテレビをご存知だろうか？ それは、地デジ対応テレビのことである。この春に国の政策で多くの学校に配備されたこの大型テレビがあれば、電子黒板がなくてもそれのできることの大半は可能になる。なぜなら、デジタルテレビの多くは直接パソコンをつないで生徒に画面を見せられるからだ。これを使うと英語を読ませる活動が簡単にできてしまう。

教材の作り方は、パワーポイントのようなプレゼンテーションソフトで、生徒に見せる画面を作って授業で使うだけ。今まで、画用紙やスケッチブックに書いて生徒に提示していた物をノートパソコンやiPodに入れて持ち運び、生徒に見せることができる。しかも、アニメーションの設定により、文字や写真の表示方法を工夫すると多彩な教材を作ることが簡単にできる。



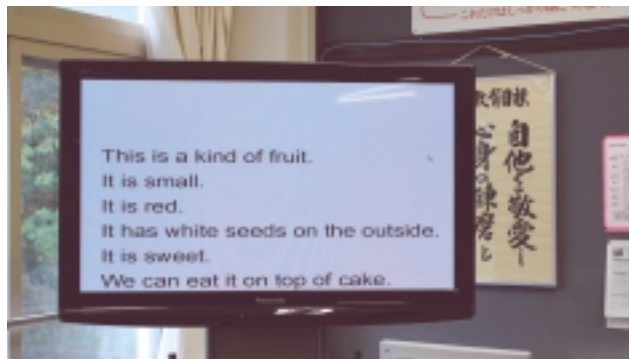
1. 曜日、月、数字の練習

例えば、月の名前の練習は、上の写真のように、パワーポイントでアニメーションの自動実行を設定した画面を使うと、次々と自動的に表示される12月までの画面で約1分の練習ができ、即座に言えるような知識にすることができる。

この画面は、最初に「1月」という表示が出て、0.3秒後に「January」が出てくる。生徒は「January」が出てくる前に「ジャン્યuary」と言わなければならない。生徒にとっては適度なスピードと難易度なので、楽しみながら集中して取り組むことができる。

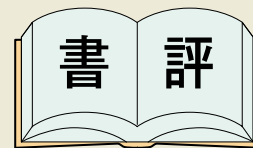
2. 読むワードクイズ

ワードクイズとは It's a kind of animal. It's black and white. It's from China. のように、英語でヒントを言って相手にその物(パンダ)を答えさせる活動である。これは、口頭で行うと「聞く・話す」練習になるが、この英文を文字で提示すると生徒は意欲的に英語を読んで理解しようとする。わかったら挙手をさせ、学級の3分の2以上の生徒が理解した段階で、クリックして答えを表示。解答後、その英文の解説をして理解を深め、その英文を音読すると、読む力をつけさせることができる。ALTに色々な題についてのヒントの英文を作ってもらい保存しておく、いつでも使える貴重な教材になる。



3. ソフトが手元にない場合

さて、ここからが本当の裏技。ワード、エクセル、パワーポイントと互換性のある無料ソフト「オープンオフィス」をご存知だろうか？ Open Officeで検索し、ダウンロード、インストールする。そのソフトの中のImpressがパワーポイントと同様のプレゼンテーションソフトで、パワーポイントのデータを表示・編集できるソフトである。興味のある方は、私のHP(<http://www15.plala.or.jp/ken-o/meiji2/ict.html>)から、各種デジタルテレビ・電子黒板教材がダウンロードできるのでそのまま使用したり、自分好みに変更を加えて使ってみていただきたい。ただし、ご使用に際しては自己責任でお願いしたい。



日本人の英語力

—それを支える英語教育の現状—

菅正隆 著

A5判・160頁 定価1,995円(本体1,900円)

発行: 開隆堂出版



とにかく元気を与えてくれる本である。ご存知のように、著者の菌に衣着せぬ鋭い舌鋒は、時には行政や国の政治に向けても火を噴くなど、これまで絶えず英語教育に大きな影響を与えてきた。本書は、その英語教育界の「奇才」が2001年から2010年まで10年間に渡り、自分の信念を書き綴った『英語教育』(大修館書店)の人気連載コラム「英語教育時評」「菅先生に聞こう！授業の悩みQ&A」「英語教育ここだけの話」を、それぞれ第1～3章として、それに本書のために新たに書き下ろした二篇を第4章として一冊にまとめ上げたものである。

第1章では、私たちが普段英語教育に何となく抱いている不安や不満に著者は真正面から向き合い、ズバリ直球勝負で解説する。『民間は善で、教員は悪か？』では、公教育と企業との交流について、著者は「先生方は生徒を見、企業は利益を見ている」と断じ、価値観の全く異なる人々と安易に交流を進めようとしている教育委員会に警鐘を鳴らすとともに、教員にも「自分たちの使命を一層強く意識し、主体的に行動する時代が来た」と意識改革を強く促している。その他、多くの英語教員が危惧しているALTの質の低下とその改善策が述べられた『問題ALTに喝！』や、生徒のことを常に考え、地道に努力を続ける教員の姿を通して研修に関わる国家予算について切り込む『「地上の星」にもっと光を！』など、ページをめくるたびに次々と繰り出される説得力のある熱いメッセージに圧倒されてしまう。

第2章は一転、著者による「悩み相談室」に変貌する。英語指導法に関する様々な質問に対し、著者が豊富な指導経験をもとに、メンターとしての的確にアドバイスをしている。教職経験年数の少ない教員に向けた『新採教員の「三種の神器」とは』をはじめ、英語嫌いをなくす指導法について多くの示唆を与えてくれる『魅力的な先生に変身するには』や、良き授業者としての英語教員を観点別にチェッ

クする『こんな教員になってはいけない』。また、スキル別に「菅流」指導法を公開する『読解力向上のために』や『リスニング力向上のために』など、初任者からベテランまで明日からの授業改善に直結する25のテーマについて、懇切丁寧に著者が答えている。授業に、そして英語教員として行き詰まったとき、そっと読んでみたいQ&A集である。

第3章になると、著者の筆は益々冴え渡る。著者の幅広い人脈から得られた貴重な情報が随所に織り込まれ、私たちの知らない英語教育の裏側を覗かせてくれるのが嬉しい。中学校の新学習指導要領には実は数値化された到達目標があったという『消えた到達目標』。実際に現地に赴き、各国の外国語教育の現状を探る『昨今の海外英語教育事情』や『行って見て知るブータン』などには、「情報は力」と言い切る著者の真骨頂が見られ、思わず驚きをもって読み進めてしまう。一方で、胸に染みる言葉が読む者の心を震わせ、静かな感動が尾を引く『支えてくれる人の温かさに触れる』など、エッセイストとしての著者の一面を見ることができる。

第4章は本書のために書き下ろされた二篇から成る。そのうちの一篇の『政権交代と英語教育』では民主党の事業仕分けをバツサリと切り捨て、「このような方々に国の教育を委ねることに不安を感じる」と切れ味鋭く論じる。『国家百年の計』とともに読み応え十分である。

英語を社内の公用語にする企業が増えつつある今日、日本の英語教育にはコペルニクス的大転換が求められている。そのためには世論を巻き起こし、政治的に教育改革を断行する坂本龍馬のような人物が必要だと著者はほえる。しかし、本書の最後のページを閉じたとき、誰もがきつと思うであろう。著者こそがその坂本龍馬ではないかと。この冬、一番のお勧めの本である。

(大阪府教育センター首席指導主事 蛭田 勲)

封じ込めてはいけない responsiveness

園児の豊かなコミュニケーション

附属幼稚園の園長歴はまだ8か月程度だが、160名の園児のコミュニケーションの在り様に、「えっ、そうなんだ!」と思わされるがよくある。

自分、友だち、教師など人間相手のコミュニケーション、花、虫、土、空、雨など自然相手の場合、そして、服、靴、ハンカチ、本などモノを相手のコミュニケーション。園児たちは、その豊かなコミュニケーションを通して、日々その術を身につけている。驚嘆するのは、この人間、自然、モノとのコミュニケーションにおける、「反応のよさ」である。

その正体は responsiveness

日本語訳は、『研究社新英和中辞典』によると、「反応性、応答性」となり、その形容詞(responsive)は、「すぐに反応[応答]する」「敏感な」となる。やはり、平たく言えば「反応のよさ」ということになるであろう。

手抜きで、インターネット上の定義を見てみると、(<http://www.thefreedictionary.com/responsiveness>), the quality of being responsive; reacting quickly; as a quality of people, it involves responding with emotion to people and eventsとなっている。後者の定義を拝借して、「園児の反応のよさ」を次のように表現してみた。As a quality of preschool children, it involves responding spontaneously with emotion to people, nature and events.

園児たちの responsiveness の例

以下は私自身が実体験した例である。保護者が園児のために開く「お楽しみ会」(演芸会)当日の園児との会話である。自分の保育室の一部が会場の道具置場になっているのを見た園児が、私に話しかけてきた。

「今日、本番なんだよね」(女児：謎かけふう)

「何の本番?」(私：知らない振りをして)

「お楽しみ会の」(女児：嬉しそうに)

「お母さん何をするの」(私：興味津々と)

「リズムダンスだよ」(女児：得意げに)

次の例は、保育室の外にさりげなく置いてある遊具の状

態からジャングルの沼を想像した男児二人との会話である。

「ワニになるんだ」(男児A)

「僕も」(男児B)

「へー、可愛いワニさんになっちゃうナ」(私)

一瞬考え、すぐに動作をつけてきた。

「ガオー、ガオー」(二人)

「ワァー、可愛いワニさんだ」(私)

「ガオー、ガオー」(二人：ひととき大きな声で)

子どもたちは、この恐るべき responsiveness のかたまりである。この天からの授かりもので、「(非言語・言語の)コミュニケーション力」を鍛え、大人たちには「可愛い」と思わせ、さらにコミュニケーション力を伸ばして「生きる力」を培うのである。

第二言語習得にも欠かせない responsiveness

母語習得に必要な responsiveness は、実は、第二言語習得にも欠かせない。子どもたちが本来(生来)持つ responsiveness を生かしてこそ、素地や基礎が養われ、自然なコミュニケーション能力が身につく(別に指導要録に言及したいわけではない)。

ご存知のように、コミュニケーションの「内容」と「方法」には、常になんらかの「態度」が伴う。この「態度」の核は responsiveness だ、と気づいたのは、園児とのお付き合い(?)のおかげである。その「態度≒responsiveness」をコミュニケーションの「内容」と「方法」にいかにかかすことができるか。今、それが小学校教師、中高英語教師に問われている。「態度育成」ではない、「本来(生来)ある態度」をどのように授業展開に活用していくか、なのである。「態度」を封じ込めた「内容」、「方法」のうんぬんかんぬん、はいかがなものであろう。

まず教師自らが responsiveness を持って授業に臨むこと、については機会を改めてお話ししたい。

(宇都宮大学教授 渡辺 浩行)

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、2011年3月、5月、9月にそれぞれ発行の予定ですので、原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を進呈いたします。